vol. 6
Sep.2018

市史編さん広報紙

たちかわ物語

TA CHI KA WA MO NO GA TA RI

向郷遺跡出土竹内勇貴氏寄贈資料　立川市歴史民俗資料館所蔵（同裏表紙）

新たに立川市史編さんが始まってから今年で４年目を迎えました。今年度は『新編立川市史 資料編 地図・絵図』が刊行される予定です。また、先史部会からは『向郷遺跡調査報告書 ―竹内勇貴氏寄贈資料―』が、民俗・地誌部会からは『砂川青年団資料集 ―青年団誌『いづみ』・戦後砂川青年団についての座談記録―』が刊行される予定となっています。

今号では立川市内にある遺跡について解説し、先史部会がどのような活動をしているかご紹介します。部会特集（先史部会）でも竹内資料についてより深く知っていただくための解説をおこないます。「資料をよむ」では『資料編 地図・絵図』に関連する村絵図をもとに、当時の人びとの生活を垣間見ていきます。

今回の立川写真館では、古文書を解読するのと同じように、土器から分かってくるいろいろな情報をご紹介していきます。みなさんも土器にドキドキしてみませんか。

目次

・新しい市史の編さんによせて …… 2
・部会短信 …… 3
・市史のつくりかた
　先史時代の立川 …… 4～5
　＊連載＊
　・立川おっこぼれ話「江戸時代の絵図と方位～北が上とは限らない？～」… 2
　・資料をよむ～「武蔵国多摩郡砂川村魚絵図面」に見る砂川の田用水と水田～… 8～9
・部会特集（先史部会）
　向郷遺跡出土 竹内勇貴氏寄贈資料の整理と調査 …… 6～7
・新編立川市史 刊行物紹介 …… 10
・平成30年４月～９月活動報告 …… 11
・資料・情報提供のお願い …… 11
・立川写真館 先史部会編 …… 12

新しい市史の編さんによせて

立川市史編さん委員の保坂一房さんに、立川市史に寄せる思いをうかがいました。

多摩地域における自治体史の編さん（保坂　一房　編さん委員）

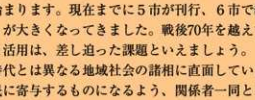
昭和34（1959）年の『小平町誌』を嚆矢（こうし）とする戦後多摩地域の自治体史編さんは、1960年代から90年代にかけて、全31市町村（当時）で市町村史が刊行されました。『立川市史』上下巻は昭和43、44年に刊行されて、これ以降の編さん事業は、資料集や目録、調査報告書などの刊行が本格化していきます。

当時多摩地域は人口が急増して、各自治体は学校建設や道路整備などインフラ整備に追われていました。また、開発によって、考古遺物・古文書・歴史的建造物・民俗行事などの文化遺産は消失危機に直面して、市民や研究者はその保全や保護を訴えていきます。地域に所在する文化遺産の保全・保護には地元住民のコンセンサスが大切で、自治体史編さんはその重要性を訴えるものでもありました。

2000年代に入ると、戦後２度目の自治体史編さんが始まります。現在までに５市が刊行、６市で編さん事業が進行中です。今回の編さんでは、近現代史のウェイトが大きくなってきました。戦後70年を越えて、役所内に眠っている公文書（役場文書）や行政刊行物の保存と活用は、差し迫った課題といえましょう。

少子高齢化や人口減少時代を迎えて、高度経済成長時代とは異なる地域社会の諸相に直面しています。新たな立川市史編さんでは、現在から未来へと続く立川市民に寄与するものになるよう、関係者一同とともに取り組んでいきたいと思います。

立川おっこぼれ話



江戸時代の絵図と方位
～北が上とは限らない？～

右図は、享和４（1804）年に作成された「柴崎村絵図」です。平成30年３月に刊行された『鈴木家文書目録』の口絵にも収録されており、江戸時代の立川を示す資料としてみなさんの目に触れることの多い絵図です。

ところでこの絵図をよく見てみると、柴崎村を中心にして多摩川（南）は上部に描かれており、書き込まれている文字の向きも一定の方向に描っているわけではありません。この点に違和感を覚えられる方も多いかもしれません。図の左下には絵図の作成に関わった人たちの名前が記されており、文字の向きからこの絵図では多摩川（南）側を主たる方位（上）としていたと判断することができます。

▲地図作成に関わった人たちの名前が、多摩川（南）を上に記されているのが分かります。
「柴崎村絵図」享和４（1804）年　立川市指定有形文化財　立川市歴史民俗資料館蔵

実は江戸時代までの絵図には、現在のように北を上にするという約束事はありませんでした。集落など強調したい部分を中心に描き、上の方にはその絵図を使用する、あるいは見るときに方位の基準となるような施設（城や寺社など）、河川、山などをランドマークとして描く、あるいは暗示させることが多かったようです。柴崎村の人々は多摩川（南）を基準として方位を捉えていたのでしょう。多摩川は村々の境界線にもなっており、当時の人びとにとって重要なランドマークだったと思われます。（鳥越）

部会短信（平成30（2018）年度前期）

先史部会

4月に向郷遺跡の竹内勇貴氏寄贈資料の整理が終了し、報告書の原稿と図版もほぼ完成したため、現在は年度末の刊行に向けた編集作業を行っています。また、大和田遺跡第1次・第3次・第4次調査の整理作業も本格的に開始し、優品を中心に資料の図化や写真撮影を進めています。6月には、市民の方が収集し約30年前に歴史民俗資料館に寄贈された石鏃の調査を開始しました。また、今年2月に行った沢稲荷の測量データを、國學院大學考古学研究室の協力を得ながら解析を進めています。解析の成果は、立川市古墳時代調査の報告書として刊行する予定です。

寄贈された石鏃の調査風景

古代・中世部会

『資料編・古代中世』（2019年度刊行予定）刊行に向けて、市内外で古文書や石造物の調査を進めています。春にはあきる野市の阿伎留神社と五日市郷土館で武州南一揆関係文書の原本調査を実施しました。この文書は南北朝・室町時代の武蔵国にいた武士団について確認できる貴重な史料ですが、不明な点も多いことから料紙・筆跡といった文書の形態を中心に確認していきました。

夏には普済寺第三世住持直庵啓端和尚が開創したことで知られる昭島市の廣福寺で、啓端和尚に関する記録類や位牌を調査したほか、石造物の拓本を採りました。また、物外可什和尚が開創した国立市の南養寺では、鎌倉～室町時代の石造物の調査を行いました。

昭島市廣福寺での調査風景

近世部会

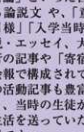
『資料編・近世①「柴崎地区」』（2020年度刊行予定）刊行に向けて、掲載する史料の翻刻や選定作業を進めています。昨年度末に調査報告書『鈴木家文書目録』を刊行したので、鈴木家文書から着手しました。最終的には1000点程度の史料を掲載する予定ですので、先の長い作業になりますが、時間との勝負でもあります。掲載する史料のほとんどは初公開となることから、江戸時代の立川地域の歴史をより詳細にお伝えできるものにしたいと考えています。また、今年度からは砂川地区の史料所在調査を始めました。古い史料に関することなどご存じの方は市史編さん担当までご一報いただけると幸いです。

鈴木家文書を整理する調査員

近代部会

近代部会では、『資料編 ・近代②』（2020年度刊行予定）に掲載する資料の収集と選定を進めています。今回は、これまでに収集した資料の中から、東京府立第二中学校（現・都立立川高校）の学友会雑誌『武蔵野』をご紹介します。

『武蔵野』は、時代によって差異はありますが、論説・小説・エッセイ・詩・会報など様々な文章をまとめた文集です。「自学自習論」といった自分の考えを論じる論説文 や、「童話 お日様とお月様」「入学当時の所感」等の小説・エッセイ、大運動会・修学旅行の記事や「寄宿舎事情」などの会報で構成されています。部活動の活動記事も豊富に掲載されており、当時の生徒がどのような学校生活を送っていたのかが分かる資料です。



東京府立第二中学友会雑誌『武蔵野』
第38号の表紙
昭和3（1928）年2月

現代部会

『資料編・現代①』（2019年度刊行予定）に向けて、引き続き資料調査と掲載資料の選定作業を継続しています。具体的な資料として、地元の公文書や外部機関の所蔵する米軍資料、市内の企業や市民の方からご提供いただいた資料、写真・記録映像など、幅広い資料を収集しました。また、選定した資料を原稿化する作業も、今年度から始めています。

このほか、今年度末に刊行予定の『資料編地図・絵図』の解説やコラム・キャプションの執筆も、並行して進めています。

立川市議会事務局
『昭和29年中会議録綴』

民俗・地誌部会

民俗・地誌部会では、砂川地区の青年団関係資料をまとめた報告書を平成31年1月に刊行する予定となっており、その編集作業を進めています。

調査においては昨年度に引き続き柴崎地区（旧立川村）に重点を置いた戸別の聞き書きを行ったほか、念仏講に参加されている方々から座談会形式でお話をうかがうことができました。普済寺で行われた大般若経転読祈祷会などの行事や祭礼の観察記録調査も並行して進めています。

また、6月から7月にかけて立川市自治会連合会加盟の各自治会を対象としたアンケート調査を実施し、多くの自治会の方々からご回答を頂いております。調査にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

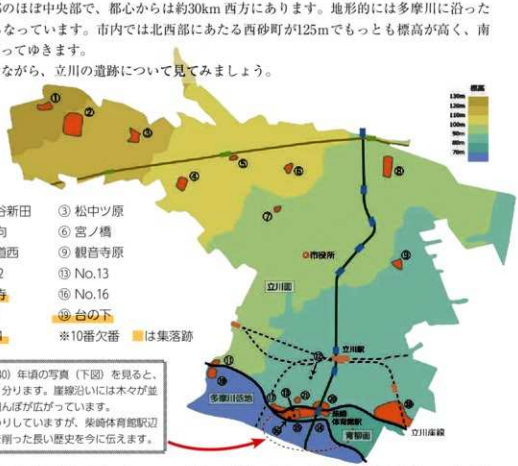
普済寺で5月15日に行われた大般若経転読祈祷会の様子

先史時代の立川

立川市が位置するのは東京都のほぼ中央部で、都心からは約30km 西方にあります。地形的には多摩川に沿った低地と一段高い武蔵野台地からなっています。市内では北西部にあたる西砂町が125mでもっとも標高が高く、南東に向かってだんだんと低くなってゆきます。

今回は地形図と照らし合わせながら、立川の遺跡について見てみましょう。

立川の遺跡一覧



① 西砂川　② 殿ヶ谷新田　③ 松中ツ原
④ 天王橋Ｂ地点　⑤ 上水向　⑥ 宮ノ橋
⑦ 大山道東　⑧ 川越道西　⑨ 観音寺原
⑪ 台　⑫ No.12　⑬ No.13
⑭ 大和田　⑮ 普済寺　⑯ No.16
⑰ 都史跡立川氏館跡　⑱ 向郷　⑲ 台の下
⑳ 下大和田　㉑ No.21　※10番欠番　■は集落跡

赤い線で囲まれた地域の昭和15(1940) 年頃の写真（下図）を見ると、台地、崖線、多摩川低地の様子がよく分ります。崖線沿いには木々が並び、台地上には住宅地が、低地には田んぼが広がっています。
現在は市街化が進み、風景は様変わりしていますが、柴崎体育館駅辺りから続く急な崖は、多摩川が台地を削った長い歴史を今に伝えます。

人が生きていく上で最も重要なのは水を確保することです。立川の遺跡の分布から、水と人との関わりを見ることができます。

立川市では、多摩川に近い南部地域で多くの遺跡や遺物が発見されています。多摩川の流れが長い年月を経て武蔵野台地を削り、階段状に段丘を形成しました。この段丘末端の斜面を崖線と呼びます。崖線は歩いて上り下りできるなだらかな場所もあれば、急な崖になっている場所もあります。台地に降って浸みこんだ雨水が崖線下で湧き水となって、やがて小川となります。

市内で規模の大きい縄文時代中期（約5,000年前）の大和田遺跡（柴崎体育館駅周辺）と向郷遺跡（羽衣町三丁目付近）は市南部の立川崖線沿いに形成されています。この周辺はやや急な坂になっていて、大和田遺跡の近くには根川が、向郷遺跡の近くには矢川が流れています。縄文時代当時は、護岸工事や水量を制御する技術がなかったので、たびたび起こる水害にも備えなければなりませんでした。台地上に生活の拠点を置き、緑と水の豊かな周辺地域で狩猟・採集が中心の食糧調達をするのが、当時の生活スタイルだったようです。

一方、市北部の砂川地域からも、わずかですが旧石器時代から縄文時代前期の石器などが採取されています。この地域はまだ本格的な発掘作業が行われておらず、かつての残堀川の流路やその他の水場についても不明な点が多いため、当時の人びとがこの地でどんな活動をしていたかはっきりとは分かっていません。調査が進めば、立川市域全体から見た人びとの居住地の移り変わりや、周辺地域との交流の様子も明らかになっていくでしょう。

◀左図の色が塗られている部分が多摩川低地
柴崎町周辺／南側、多摩川上空から（昭和15(1940) 年）
歴史民俗資料館所蔵

先史部会では、旧石器時代から古墳時代の立川市について調査しています。他の歴史資料と違い、先史部会が取り扱う資料には文字の記録がありません。どのような情報を元にして、どのような調査をしているのでしょうか。まず、人が住むようになるまでの環境の成り立ちから見ていきましょう。

地形と地質

火山の噴火によって飛散した火山灰や軽石は、一定の範囲に降り積もることで共通した地層を持つ大地が作られます。

大地は雨などに侵食されて谷を形成し、河川を作ります。水の流れが大地を削ることで地形は変化し、削り取られた土壌は水の流れに乗って遠方に運ばれ、堆積します。

台地や低地といった地形は、このような作用が長い年月をかけて作り上げたものなのです。

人と生き物

地形が変化すると、人間や生物が住む環境も変化していきます。住居の選定は自然災害に耐えうる地形であるか、狩猟・採集に適した環境であるかなど、いくつかの条件が必要と考えられます。同じ地域でも、時代によって人が住んだ痕跡が残っていない場合もあります。当時起こった自然災害がきっかけで移動を余儀なくされたり、狩猟・採集のみならず、植物の栽培に適した土地を求めて移動をした可能性も考えられます。

地形や地層などの自然の条件と、人びとの生活の営みを基本の情報とし、先史時代の調査は進められていきます。次はもう一歩進んで、遺跡や出土した土器などをどのように分析し考察していくか、先史部会が特に取り組んでいる事例を見てみましょう。

周辺地域との比較

土器の文様や形状には地域性が色濃く出るので、集落同士の関係性を知る手掛かりとなります。同じ集団が場所を変えて別の時期に作った集落なのか、それとも違う集団が同時期に集落を営んだのかということが、出土した土器を比較することで判断できます。

そのため、立川市内のみならず、市周辺地域の遺跡も調査の対象となります。これらの調査を通じて、立川市内の遺跡の特徴を捉えていきます。

胎土（たいど）分析

胎土（たいど）（素地土（きじど））とは土器に使われている粘土質の土のことを言います。そのままで焼くと割れやすいため、砂礫（されき）などの鉱物がつなぎとして混ぜ込まれています。

土には土地それぞれに鉱物組成の違いがあり、それを分析することでどこで採取された土なのか判断できます。その違いから、土が別の場所で採取されたものか、完成した土器そのものが運ばれてきたかが判断されるのです。

種実圧痕（しゅじつあっこん）分析

種実圧痕（しゅじつあっこん）＝土器の表面、または断面に残った植物の種実の痕跡のこと。圧痕に樹脂を注入してできた型を、電子顕微鏡を使って分析します。2000年代初頭に開発され、当時の人びとの食生活がより詳細に分かるようになっていきました。立川ではダイズやアズキなどの存在が確認されています。

狩猟と採集が中心だと考えられてきた縄文時代の食文化も、豊富な栽培活動に支えられていたのかもしれません。

先史部会では、この他にも立川市民の方から寄贈された石鏃の調査や、古墳とみられる場所の測量調査を行っています。これまでに発見されてきた遺跡の調査を元に、より広い範囲で、最先端の技術で調査を進めていきます。先史時代の生活を明らかにし、立川に住んだ人びととの繋がりをとらえていきたいと考えています。（山下）

部会特集 先史部会

向郷遺跡出土 竹内勇貴氏寄贈資料の整理と調査

先史部会では、砂川地域で出土した石器や向郷遺跡の竹内勇貴氏寄贈資料（以下、「竹内資料」と表記）、古墳と考えられている塚など、立川・砂川地域で発見された旧石器時代から古墳時代までの考古資料を整理し、文字がない時代の歴史の調査を進めています。今回ご紹介する竹内資料は、縄文時代中期中葉（約5,000年前）の良好な一括資料であり、調査を進めた結果、多摩地域の典型的な資料として位置づけられることが明らかになりました。調査の成果は今年度末に報告書として刊行し、今後刊行される資料編・通史編の基礎資料として市民の皆様に広く公開いたします。

1．竹内資料とは

竹内資料は、竹内勇貴氏が向郷遺跡で発掘した資料です。竹内氏が小・中学生だった昭和45～52（1970～77）年頃に発掘したものを、昭和57（1982）年に、市の文化財教育に役立てて欲しいと立川市へ寄贈されました。

竹内少年は、遺物を丁寧に洗浄して分類するだけなく、ポスターカラーなどで発掘したと思われる日付や場所、竪穴住居跡のような遺構の種類などを、土器や石器の細かい破片にまで書き込んでいました。土器の接合も行っており、なかには石膏によって補強したり復元したりすることもありました。

このように竹内少年は考古学上の基本的な整理方法を用いて遺物を整理しており、とても小・中学生が独力で行ったとは思えないほどです（本誌第３号「資料をよむ」参照）。

2．向郷遺跡とは

竹内少年が発掘した向郷遺跡は、錦町四丁目・羽衣町三丁目の一帯に分布する縄文縄代中期（約5,500～4,500年前）の大規模な遺跡です。東西約600m、南北約400mという広大な範囲であり、これまでに110次近い発掘調査が行われてきました。

なかでも立川崖線沿いに位置する第15次地点（市営住宅地点）は、縄文時代中期後葉（加曽利（かそり）E式期・約4,500年前）の環状集落が発見されたことで有名です。また、第12次地点（たましん事務センター地点）は、中期中葉（勝坂（かつさか）式期）の集落で、数多くの優良土器が出土しました。

3．どこで発掘したのか

竹内少年が発掘したと推定される場所

本誌第３号で竹内資料を紹介したときは、竹内少年は羽衣町三丁目交差点の東南付近で発掘したと推定していましたが、その後、新たな資料が見つかり、交差点の北側を中心に発掘したことがわかりました。この発掘推定地は、向郷遺跡全体のなかでは北側に位置しています（左図参照）。

竹内少年によれば、発掘推定

地には竪穴住居跡があったようです。この場所は第8次地点と第12次地点に挟まれており、どちらの地点でも勝坂式期の竪穴住居跡と土器が発見されています。竹内少年が発掘した資料は勝坂式土器が主体を占めており、双方の地点と共通します。

このことから向郷遺跡では、北側に勝坂式期（約5,000年前）の集落が営まれ、加曽利E式期（約4,500年前）になると南側の立川崖線寄りに移ったことになります。

4．どんなことがわかったのか

竹内資料の土器型式からは勝坂式期という年代だけでなく、土器を作り使った縄文人たちの活動もわかります。

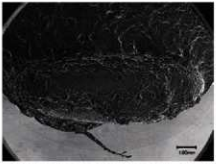
向郷遺跡のそばを流れる矢川の下流約1.5kmには、国立市南養寺（なんようじ）遺跡があります。竹内資料と南養寺遺跡の土器型式を調べたところ、南養寺遺跡の方が竹内資料よりもいくぶん古いことから、矢川流域を同じ生活領域とする集団が、南養寺集落から向郷集落の竹内少年の発掘推定地に移ってきた可能性が浮かび上がります。

また、竹内資料の土器は、大部分は地元の土器ですが、山梨・長野方面の土器や茨城方面の土器が少ないながら含まれており、遠い地域と文化交流を行っていたことがわかります。このことは、これらの土器に、それぞれの地域に特有の鉱物が含まれていたことからわかりました。

さらに、向郷遺跡に住んでいた縄文人はさまざまな植物を利用していたことが、土器に付着した植物種実の痕跡からわかりました。種実の痕跡に医療用シリコンを注入して型（レプリカ）を作成して電子顕微鏡で観察したところ、ダイズやエゴマの種実などが含まれていたのです。

ダイズやアズキは縄文時代中期に大型化が進み、栽培が行われていた可能性が指摘されています。向郷遺跡に住んでいた縄文人も、ダイズなどを栽培していたかもしれません。

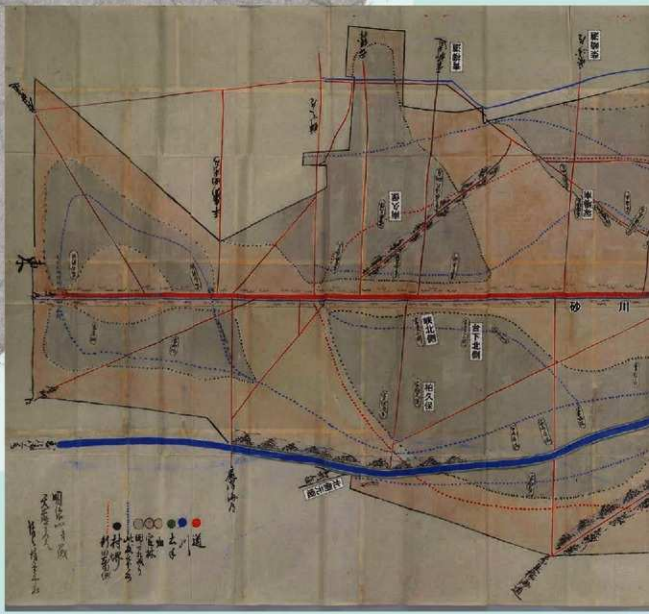
竹内資料の土器集合写真（立川市歴史民俗資料館所蔵）


竹内資料の土器から採取された種実圧痕レプリカ（ダイズ属）の電子顕微鏡写真
（撮影：株式会社パレオ・ラボ）

地図注　向郷遺跡の背景地図は、「国土地理院基盤地図情報・立川（国土基本情報）」を使用し、QGIS2.18（QGIS Development Team 2016-2018）を使用して描画した。向郷遺跡の範囲および調査位置等の基礎データは、立川市歴史民俗資料館より提供。

資料をよむ ～「武蔵国多摩郡砂川村龕絵図面」に見る砂川の田用水と水田～

立川市史編さん委員　小坂克信



1．はじめに

「砂川に水田があった」というと驚く方がいるかもしれませんが、明治４（1871）年の「武蔵国多摩郡砂川村龕絵図面」（以下、龕絵図面とする）には、砂川村の水田と田用水の予定地が描かれています。この龕絵図面は砂川六番（台上）の清水家の旧蔵で、大きさは縦940mm、横2,050mmで四方位が示されています（上が南）。

2．何のために描かれたのか

この絵図が描かれる約１年前の明治３年６月、土木司は34あった玉川上水の分水口を半分の17に統合します。この時、水量は「飲み水は100人につき１坪（１寸〔約３cm〕四方から入る水量）」などと決められ、ほとんどの分水で減らされます。例えば、柴崎分水は150坪から52.5坪、殿ヶ谷分水は64坪から24坪になります。増水願いが多く出されますが、認められませんでした。

しかし、実際には水が余ったようで政府は新田開発を計画し、砂川村はこれに応じて願書と絵図面を提出します。この控えが龕絵図面で、新田予定地とそこに給水する用水を得るために描かれました。この願いは、明治４年５月東京市が水不足になった時は、田用水を止めることを条件に500坪が許可されます。他に許可されたのは殿ヶ谷分水30坪、深大寺分水169坪２合、福生分水16坪７合５勺、田無分水113坪です。当時、砂川用水は分水口の統合によって、現在の昭島市から三鷹市まで流れていました。その流末に深大寺分水が新設されたので、調布市の野川までつながります。

3．絵図からわかること

龕絵図面の中央には伊奈道（五日市街道）と砂川用水が描かれ、その南北に沿って家々が並んでいます。砂川村が砂川用水を飲料水や生活用水に使うことで、東西に広がる街村になったことがわかります。また、新田予定地が灰色、そこに給水する田用水が青い点線で描かれています。この水路は、玉川上水の北側に１本、砂川用水の北側に１本（北田用水）、南側に２本（南田用水）、計４本が計画されます。玉川上水の北側は殿ヶ谷分水からの分水で、増水された30坪分です。この水路は幅２間（約3.6m）、長さ2400間（約4,362m）余り、流末は北側元堀（現・小平用水）に流れ込む

平成31年３月に刊行される『新編立川市史 資料編 地図・絵図』に掲載される資料の中から、「武蔵国多摩郡砂川村亀絵図面」について、編さん委員の小坂克信委員に解説をしていただきました。

本文中に記載のある地名や道の名称を絵図上に表示したもの

水路名

補足のため水路名を追加。絵図作成当時砂川用水は「南側元堰」「南側分水」「南側元樋」などと呼ばれていたようです。

予定です。北田用水は砂川一番で砂川用水から分かれ幅２間、長さ3500間（6,363m）で、途中２カ所で分岐し、１本は掛け樋で砂川用水の南側を潤す計画です。

この水田や水路の場所を示すため、大神海道や青柳海道、柴崎道などの道が朱で描かれ、現在では使われていない地名が記されています。例えば、南田用水は上橋場南側の西で２つに分かれ、北の分水は木村、木村北側、東畑、塚場南などを流れます。この他、土地の高低差を示す台下北側や峡北側、窪地を示す柏久保や南久保、稲荷久保などの地名が記されています。また、見影橋下流の玉川上水は、河岸段丘で下流の土地が高くなっています。そのため、上流に土手を築いていますが、この付近の地名は築土手向、土手下、土手向などです。

４．他の資料と比べて

「皇国地誌、村誌」（『砂川の歴史』）には、次頁の表のように明治10（1877）年頃と推定される４本の田用水、合計5597間（約10,175m）が記されています。水田の面積は５町７反５畝26歩で、亀絵図面には水田予定地が広く描かれていますが、砂川村の耕地面積のわずか0.7％に過ぎません。

明治10年６月東京市の飲料水不足で、田用水の水量は半減されます。つまり、砂川用水は250坪、殿ヶ谷分水は15坪になります。そこで、砂川村では全ての田に水を行き渡らせるように、同年10月４本の田用水を甲から戊までの５本に分けます。その後も開発は続けられ、明治31（1898）年４月には水田が９町４畝13歩に増えています（砂川村役場文書）。しかし、明治40（1907）年頃、東京砲兵工廠に分水を売却したので、砂川用水からの水路と水田は無くなります。

５．他の絵地図と比べて

「砂川村絵図」には砂川用水が砂川八番で南下する、明治３年６月の統合前の姿が描かれています。この絵図にも道路と地名の範囲が示されていますが、亀絵図面とは必ずしも一致しません。また、当時は残堀川が玉川上水に合流され、その北側は時に水があふれたことから“押散し”と呼ばれましたが、位置もやや異なります。

明治25（1892）年「武蔵国北多摩郡砂川村面積」には、砂川村の田用水が描かれています。現在の地図と比べると、

例えば天王橋の南、1つ目の信号から東にある第九小学校までの道路が南側田用水の跡になります。

このように他の絵地図や資料と比べることで、私たちが生活している場所が、以前どのように利用されていたのか知ることができます。平成31年3月に『新編立川市史資料編 地図・絵図』が刊行される予定です。ぜひ手に取って、まちの歴史を探ってみましょう。

明治10年頃の砂川村の田用水と水田

田用水名		分岐点	長さ	幅	深さ	水田の場所と面積	
南側田用水	甲	拝島道南	2005間（3,645m）	3尺	1尺	大山道西	9反8畝10歩
北側田用水	乙	上水内	1175間（2,136m）	3尺	1尺	上水内	3町1反9畝6歩
下南側田用水	丁	江ノ島道西	1260間（2,290m）	3尺	1尺	江ノ島道西	7反
下北側田用水	戊	川越道西	1157間（2,103m）	3尺	1尺	川越道西	8反8畝10歩

（「皇国地誌、村誌」『砂川の歴史』から作成）

新編立川市史 刊行物紹介 ～平成30年度（2018）刊行予定～

○新編立川市史 資料編 地図・絵図

明治時代から平成までの立川市内の主要な絵図・地図資料を掲載します。時代の変遷によって立川の街並みがどのように変化してきたか全体地図（全図）で振り返ります。また、立川飛行場や交通網の発達、商店街の形成など個別のテーマについてもコラムとして取り上げます。付録のDVDには高精細なデータを収録して刊行する予定です。

平成31年4月頒布予定　A4判・フルカラー・約200頁・上製本・頒布価格未定

多摩川流域村々絵図
（明治3－4（1870-1871）年）

○新編立川市史 調査報告書 民俗・地誌編1
砂川青年団資料集　―青年団誌『いづみ』・戦後砂川青年団についての座談記録―

基地闘争の時期を含む戦後約10年程の『いづみ』（砂川青年団の機関誌）［影印］と、砂川青年団についての座談会（当時の青年団長経験者等）記録を収録。戦後青年団とともに激変する生活や地域社会の様相を読み取ることができる資料を刊行します。

平成31年4月頒布予定　A4判・500頁・並製本・頒布価格未定

砂川村青年団機関誌
『いづみ』6号
（昭和29（1954）年）

○新編立川市史 調査報告書 先史編1
向郷遺跡調査報告書　―竹内勇貴氏寄贈資料―

竹内勇貴氏寄贈資料は、向郷遺跡で発掘された縄文時代中期前半勝坂式期の良好な一括資料です。土器・石器の観察のほかに、土器胎土の岩石学的分析・蛍光X線分析や種実圧痕レプリカの分析なども行い、向郷遺跡の理解が深まりました。

平成31年4月頒布予定　A4判・約200頁・並製本・頒布価格未定

向郷遺跡出土
竹内勇貴氏寄贈資料
（阿玉台式土器）

～既　刊～

○新編立川市史 調査報告書 近世編1 鈴木家文書目録

平成30年3月刊行　A4判・250頁・並製本・頒布価格1,000円

※立川市史刊行物は以下の場所で頒布しております
○立川市市政情報コーナー
　立川市泉町1156－9　立川市役所3階
○立川市歴史民俗資料館
　立川市富士見町3－12－34

平成30年４月～９月活動報告

月	日	活動内容
4月	2日	先史部会・大和田遺跡第１次・第３次・第４次地点の整理開始
	8日	第１回・近代部会会議
		民俗・地誌部会・普済寺睦心会座談会
	20日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
5月	9日	近世部会・砂川地区史料所在調査
	15日	民俗・地誌部会・普済寺 大般若経転読祈祷会見学
	18日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
6月	5日	民俗・地誌部会・自治会アンケート調査開始
	15日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	17日	古代・中世部会・昭島市廣福寺調査
	19日	古代・中世部会・国立市南養寺調査
	27日	第１回・現代部会会議
	28日	先史部会・古墳調査
	30日	先史部会・個人寄贈石鏃の調査開始

月	日	活動内容
7月	1日	第１回・民俗地誌部会会議
	20日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	22日	第１回・近世部会会議
	21～22日	民俗・地誌部会・祭礼調査
8月	7日	第８回・立川市史編集委員会議
	17日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	26日	第２回・近代部会会議
	28日	古代・中世部会・高幡不動尊金剛寺・あきる野市小宮神社調査
	8月後半	民俗・地誌部会・祭礼調査（熊野神社、諏訪神社）
		先史部会・古墳調査
9月	3日	第２回・現代部会会議
	16日	民俗・地誌部会・祭礼調査（阿豆佐味天神社）
	20日	たちかわ物語 vol. 6発行
	21日	市民協働作業（立川の史料を読む会）

資料・情報提供のお願い

古文書・絵図・地図・写真・地域の年中行事・信仰・などの情報をおよせください

６月から７月にかけて自治会を対象に行ったアンケート調査では、各自治会の記念誌や歴史に関係する資料・情報をご提供いただきました。

市史の編さんには、市民のみなさまのご協力が不可欠です。ご提供いただける資料やお聞かせいただけるお話がありましたら、市史編さん担当までご連絡ください。

■文書、書類、印刷物

江戸時代から平成に至るまでのさまざまな古文書・書類・会誌・記念誌、チラシ・広告などの印刷物

■絵図、地図類、写真映像、音声

土地の変遷や街並みの分かる絵図、地図類、景観や生活の様子（お祭りなどの年中行事、七五三、結婚式などの人生儀礼、日々の衣食や住まい）などを写した写真や映像、音声など

■地域の年中行事・信仰、ムラのつきあいや慣習など

「念仏を唱える集まりがあった」といったような、昔から続いている慣習についての情報

■石器や土器など考古資料

市民から寄贈を受けた石鏃

武蔵国多摩郡砂川村之図

消防団消防操法大会のアルバム

市史編さん広報紙 たちかわ物語 vol. 6

平成30(2018)年９月20日発行

発行　立川市
〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9
編集　産業文化スポーツ部地域文化課市史編さん担当
〒190-0022　東京都立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUX ビル 201
TEL　(042)506-0021 ／ FAX (042)525-1601
E-mail　chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp
URL　http://www.city.tachikawa.lg.jp/chiikibunka/sisi/hensanshitu/shishi_top.html
印刷　ぎょうせいデジタル株式会社

市史編さんHPはこちらからアクセスできます。

［市史編さん広報紙に関するご意見・ご感想をお待ちしています］

立川写真館

先史部会編

土器にはさまざまな文様がありますが、どれも似ているような、似てないような…。土器って「なにがどうちがうの？」と思いませんか？
実際に土器の調査をしている先史部会の編集委員に、土器の見かたと何が分かるのかをお聞きしました。

かたち

文様はどんな道具を使って付けられたのか
文様やかたちは何を表現しているのか

なんと言っても見た目から分かる情報が大事です。

表面に施された文様は、縄、木、竹、貝などを細工して押し付けたり、転がしたり、粘土を貼り付けられたものがあります。この表現は、時代や地域によって変化していくようです。土器の文様の中には、渦を巻いたようなひも状の装飾が周りを一周していたり、時にはヘビの頭のような形をした造形物が付けられています。

土器や土偶には、豊穣や安産、多産など食や生命に対する畏怖や祈りが反映されているという考え方があります。ヘビには、脱皮＝生まれ変わり、不老不死を象徴する神話が、日本だけでなく世界でも見られます。

このように、何を使って文様が付けられているか、そして当時の人がどんな想いを込めて形や文様をつくりあげたのかを考えます。

▲ヘビの頭を模した把手
口を開けた威嚇のポーズか

つち

土器に含まれている鉱物の種類には地域差があります。土器をつくるための土や鉱物をどこから入手したのか、ということも地域性を考えるひとつの要素です。

土器をよく見ると、つぶつぶとした鉱物が含まれているのが分かります。当時はこれを粘土のつなぎとして使い、土器を割れにくくしていたようです。河原で採取した小砂利を土に混ぜ込んでみたり、前期の縄文土器にはイネ科の植物を混ぜ込んでいたこともあったようです。

土器の形状と文様が複雑になっていったのは、人びとの暮らしが豊かになり、活動範囲も広がっていった表れであると考えられています。土の成分や人びとの交流の様子が分かってきたように、土器の見た目の違いにも「文化の交流」が垣間見られます。

土器の機能性よりも、見た目重視な奇抜なデザインが多数見られる時期もあります。当時の世の中にも、個性的な表現が流行したことがあったのかもしれません。